
それってつまり……

月丘ちひろ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

それってつまり……

【Nコード】

N2803W

【作者名】

月丘ちひろ

【あらすじ】

親友の琴葉は、『僕』の幼馴染の美夏に恋をしていた。まさか『僕』が美夏に片想いなのだとも知らずに。

しかし、琴葉は女の子であり。同性に対する恋に困惑しながらも告白することを決意する。そんな琴葉に『僕』もまた複雑な気持ちを抱いていた。

(前書き)

とりあえず、短くまとめて読みやすくしてみました。

「今だから言えるよ、オレ」

琴葉はコーンポタージュを飲む。そのとき、僕は初めて琴葉の笑顔をみたのである。とても自然で明るい笑顔はさわやかで、心地がいい。

「オレ、美夏のこと好きなんだって」

「そうか」

僕はありきたりな相槌を打って、曖昧に笑った。美夏は僕の幼馴染だ。気が強くて、男子とケンカしても勝ってしまう。僕も彼女とよく口ケンカしてしまうけど、でも姉のようにいつも僕を引っ張ってくれる。

琴葉は照れ臭そうに笑いながら携帯を取り出す。

「昨日さ、美夏とメールアドレス交換したんだ。勇気って出してみるものだな。あんなに快く領いてくれるとは思ってもみなかった」

「まあ、前からよく話してたもんな。むしろ今までアドレス交換しなかった方が不思議なくらいだ」

「そういうものなのか？」

「まあな」

僕は壁にもたれかかりながら青い空を眺める。僕達は学校の屋上にいた。学校によっては屋上には鍵が掛っているのだけれど、僕の学校では授業中でさえも開放されている。

だから、時々琴葉と一緒に授業をサボってこうしていろいろなことを話したりしていた。

琴葉との会話はとても楽しい。堂々としていて、普通の人なら困惑することさえも気楽に話することができる。思索的でいつも会話の中には価値観が溢れていた。

人によってはきつと、重い話しになるかもしれない。あるいは、

ちんぷんかんぷんな話にもなるかもしれない。でも僕にとっては、生きる意味に等しいものだった。だから、琴葉と親友になれてよかったと純粹に思っている。

琴葉は残りのコンポタージュを飲み干す。

「それにしても、どうしたんだお前、いつもより元気ないぞ？」

琴葉に指摘されて、思わず僕は肩を飛び上がらせてしまう。

「いや、なんでもないよ。ただ、以外だなあと思っただけ」

僕は反射的にお茶を濁したような言葉を口にした。でも、そんなごまかしがきかないことはわかっている。琴葉とは3年以上の付き合いがあるから。だから、僕は必死に言及されない方法を考えた。

「琴葉はいつから美夏のことを好きだったの？」

「好きだって思い始めたのはつい最近なんだ。最初はあいつのこと、口うるさい奴とか、自分が命令する立場じゃないと気が済まない奴って思ってた。あんまり好きじゃなかった。でも、つらいときは励ましてくれたし。そっと抱き締めてくれたりもした。段々思うようになってきたんだよ。オレは美夏がいないとダメなんだって。オレには美夏が必要なんだって。それってつまり、恋だろ？」

「……うん、そうだね」

「オレ、明日、美夏に告白するよ」

「アドレス交換した直前に告白って不自然じゃないか？」

「そんなことないよ。だって、毎日のように話してるんだから」

琴葉は大きく伸びをした後、凜とした表情で僕を視る。

「だから、明日、オレ、がんばるよ」

キンコンと授業終了のチャイムが鳴る。それと同時に、琴葉は僕を置いて、屋上から出て行った。

季節は夏。緑々とした葉の揺れる音や、肌に馴染む風の音がBG Mになる。

「参ったなあ」

僕はタイルに寝そべって青い空を見上げた。雲一つない清々しい青空。だけど、今の僕の気持ちは青空とは真逆だった。

「そっか、美夏のことが好きだったんだ……」

それは僕にとって、ショックなことだった。

僕も、美夏のこと大好きだったから。

僕はぼんやりと空を見上げる。きつと琴葉はオレが美夏のことを好きだとは思ってもいないのだろう。だからこそ、打ち明けてくれたんだと思う。琴葉は優しいから。

でも、胸がつまる思いだった。複雑な気持ちだった。なぜなら、

琴葉は女の子だから。

僕は空に手を伸ばしながら呟いた。

「青い夏だな」

放課後も、僕は屋上にいた。警備員さんが屋上に来るまではここにすることが出来る。あまり人は来ないから独りで考えごとをするにはちょうどいい場所だった。

誰かに相談して、複雑な気持ちが解消されるのなら、こんなところにいる必要はない。

「……できないから、こうして独りなんじゃないかよ」

「何ができないって？」

自問自答していると、高い声が返ってきて、僕はまた肩を飛び上がらせた。今日は驚かされることが多い。向き直ると、和服をきた女子がこっちをみていた。

「美夏か、茶道部はどうしたんだよ」

「アンタが授業全然出ないから叱りにきたのよ」

「お前は僕の保護者か？　だいたい、何でここにいてわかったんだよ」

「そりゃあわかるわよ。アンタのことずっと見てるもん」

「まあ、小さい頃から一緒だったもんな。そりゃわかるか」

僕はアハハとわざとらしく笑いながら校庭を眺める。校庭には誰もいない。普段はサッカー部や野球部が練習してるはずなのに。

「もう、皆部活終わって切り上げちゃったわよ。こんな時間まで一体何考えてたわけ？」

「そっか、そんなに時間が経ってたんだな気付かなかった」

「そうやってごまかさないで、私に話さないよ。一体何に悩んだの」

そんなこと、話せるわけがない。

「別に、ただ気分が乗らなくてぼんやりしてたら時間が経ってたんだ」

「そんなわけないでしょ。何時間ぼんやりしてたのよ！ 異常よ！？」

「じゃあ、僕は異常なのさ……」

瞬間、僕の身体が強い力で僕のシャツの襟元を美夏が掴み上げた。「いいかんにしてよ、どうしてわからないの!？」

「な、何をだよ」

「私はね、アンタのことが心配でたまらないの！ 今日だってアンタがいなくなったとき、すごい不安だった。え、どうしたの？ 体調悪くなったの？ ずっと帰ってこない、どうしよう。頭の中アンタのことばかりになって何もできなかったんだから」

美夏は襟元から手を外し、僕の肩に手を置く。美夏に触れることなんてしょっちゅうあるのに、なぜかすごく緊張する。こんな感覚は初めてだ。

小さく息を履いて、美夏は呟く。

「お願いだから、いきなりいなくならないでよ。私寂しいよ、だって……」

瞬間、彼女は僕の身体を抱き締める。

心臓が圧迫されるように苦しい。酷くドキドキする。その先の言葉は、いわないで。

「私は、あなたのことを何よりも、誰よりも大事に思っているから……こんなとき、どうすればいいのだろう。」

僕は頭の中で自問自答を始めた。これはおそらく告白と受け取っ

ていいのだと思う。つまり、僕は自分の好きな人に告白されたことになる。

とても嬉しい。身体から力が抜けていくのと同時に、心臓が激しく鼓動している。とても幸せな気分だ。嬉しい。

だけど、同時に同じくらいの恐怖が僕を襲う。

なぜなら、琴葉が美夏のことを好きだからである。

美夏は僕にとって無二の親友だ。二人で会話したことは今でも頭の中に残っている。それに、琴葉は女の子だ。告白しても、美夏は受け入れないかもしれない。

僕は美夏の背中に手を回す。だけど、彼女を強く抱きしめることができない。

屋上の扉から、僕と美夏を覗きこむ琴葉の姿があったから。

……こんなとき、どうすればいいのだろう。

自問自答を繰り返すが頭は真っ白になる限りだ。

どんな選択をとっても、きっとそれなりの悲しみが伴ってくる。

そのとき、

琴葉は僕に向けて、にっこりと笑った。

そして、扉の影から手を使って大きな「○」を描き、姿を消した。それは彼女にとって苦渋な選択だったのだと思う。

同性を好きになって、その相手が異性である親友。きっと、彼女も悩んで、苦しんでいる。僕が一番大事な親友。

「美夏、ありがとう。心配かけて、ごめんね」

「ほんとよ……バカ」

「だけど、ごめん、美夏。オレ、いまから行かなきゃいけないところができたんだ」

「え？」

僕は美夏を抱き締めること無く、離れる。

「オレにも、大事なことがあるからさ」

「……そう、わかった」

美夏は和服を整えて手をふ座の前で組ながら微笑む。

「いつもありがとう。美夏、そして、気付いてあげられなくてごめんね」

「ううん、いいの。あなたに気持ち伝えられた。それだけでいいの」

ウソだ、本当はそれだけでいいなんて思っていない。本当は……

僕は思考を途中で止めて、屋上の扉を開けて、階段を降りる。遠くの頬で足音が聞こえる。その足音は階段を降り、廊下を走ることになくなっていく。そして、2階、自分の教室についたとき。足音の主を捕まえた。

「逃げんなよ、琴葉」

だけど、琴葉は振り向かない。廊下は、足音が消えて沈黙の空気に包まれた。その沈黙がたくさんの悲しみや苦しさを運んでくる。

やがて、その沈黙を打ち切ったのは琴葉だった。

「……しょうがないじゃん、オレ、女だもん。美夏が親友のお前のこと好きだったなら。オレが邪魔する理由なんかないじゃないか」

「琴葉……」

「お前が優しいこと、よくわかってるよ。オレのこと気にしてくれただよな？ でも、無理しなくていいんだ、お前は男じゃないか」

「琴葉、ちがうんだ……」

「男のお前が女の子ためらってどうするんだよ。オレなんかよりも、美夏と一緒に……」

「ちがうんだ！」

気が付いたら僕の手は琴葉の手を攫っていた。白くて透明な手。バランスを崩した琴葉は僕の身体にもたれかかる。琴葉の身体は羽のように軽かった。このまま離していったら、風に乗って飛んで行ってしまいそうなほどに。だから……

離れてしまわないように琴葉の身体を強く抱きしめた。

「確かに、オレは美夏のことが好きだよ。お前が見てたから、抱きしめられなかったよ。でも、それと同じくらい僕の頭の中はお前のことでいっぱいだったんだ。お前がいない時間なんて僕にはありえ

ないんだ。僕にはお前が必要なんだよ、それってつまりさ……」

僕は意を決したように琴葉の耳元で囁いた。

「恋だろ？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2803w/>

それってつまり……

2011年8月31日03時28分発行